

## 宮廷革帯中の最高級品：紺玉帯

—アフガニスタン産青金石の装飾—

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

### 現存する最古の皮張り鼓

いずれも鼓本体の全体的な形状は特定できないが、皮が残存したものが二双、鉄製の縁輪のみのもものが三双分と四枚が残るとされている。実見したのは前者の二双（1号及び2号）である。

毎日新聞社刊『正倉院寶物』には（以降では資料と称する）「第1号は破れているものの鼓皮二枚と調緒しらべおから成り、ほぼ完形に近い。皮中央の丸い部分を淡紅色に塗り、その外側には赤地に白で覗き花文を巡らせた文様帯を描き、さらにその外に黒色を塗る。鼓皮は縁を鉄製縁輪に巻き込み、紙を巻いた竹をはめ込んで固定している。鼓皮の縁に孔を各々十二個所ずつ穿ち、麻紐を蘇芳染した調緒を通す。図版における記述には「縁輪径27.0 革の彩色（赤・白・墨・[黒漆]）。縁輪は鉄 調緒は麻」とある。

同じく鼓皮2号については「縁に黒漆を塗った鼓皮の残片が鉄製縁輪にわずかに付着するが、ほとんどが失われている。鼓皮は縁輪を巻き込んで端を縫い付けており、第1号とは取り付け方が異なる。黒く塗った縁には紐通しの孔の痕跡が残る。（第3号から5号…略）」と記している。その形状については、林謙三『正倉院楽器の研究』によると「面径28.1 $\frac{1}{2}$ 、太さ0.7 $\frac{1}{2}$ の鉄鼓輪につぎ目のある皮を巻きつけ糸をもってとじている。」と述べている。



鼓皮残欠第1号 『平成十八年正倉院展図録』  
いまにも崩れそうな鼓皮、ただ見るだけであった。

### 鼓皮〈つづみのかわ〉残欠 第1号

[調査の結果]

脆弱が著しいので、顕微鏡検査が困難であった。あたかも半透明のガラスのような外観で、触れれば脆く、細片化して壊れてしまう。周辺部の塗料のない部分の皮質は極めて緻密に見え、ネズミに齧られたような跡もある。僅かの残毛や毛根らしき黒い点が観察されたため、皮質と判定できた。残片の一部には灰色がかった塗料に刷毛跡らしきものが認められた。しかし、灰色のもの自体に埃を払い落としたような跡が入っていることから、灰色状のものは後年に付着した汚れで、塗料の刷毛筋ではないと推察される。鼓膜の皮は極めて薄く、厚さは目測で0.1~0.2mmぐらい、生皮と思われるが、皮種の特定はできない。

## 鼓皮残欠 第2号

[調査の結果]

皮はガラス質状の、半透明の緻密のものに変質しており、触ればボロボロ壊れるような状態である。皮の一部には、埋もれ込んだ残毛が観察される。よほど注意しないと気付かないものである。毛色は明らかに褐色である。なお、紙包みにも皮の破片があるが、皮種の特定は困難である。

## 伎楽面とは何か？

石田茂作『正倉院伎楽面の研究』によると、「伎楽面の種類が文献学的には二十三種に限るものである……正倉院の伎楽面は其の数、百六十四口の多きを算えているものの、畢竟は二十三種に分類さるべきもの」と述べている。その23種とは「師子、師子児（2）、治道、呉公、金剛、迦楼羅、崑崙、呉女、力士、波羅門、太孤父、太孤児（2）、醉胡王、醉胡従（8）」である。

また、資料によれば「伎楽は呉楽ともいわれる楽舞の一で、『日本書紀』によると推古二十年（612）百濟人味摩之が中国呉の国で学んだものを伝えたという。奈良時代には寺院の重要な法会に際してしばしば演じられるようになった。これに用いる面は、標準的には1セット十四種二十三面」とし、上述と同様の内訳を述べている。そして、「現在、正倉院には……合計百七十一面あり、木彫百三十五面、乾漆のもの三十六面からなる。」

今回、調査の対象になったのは、この内の木彫の醉胡従及び師子である。

## 伎楽面 第16号醉胡従：紐

資料の図版における記述は「縦29.6 横24.4 奥行31.3 桐 黒漆地 顔面は彩色（白下地赤褐色塗、一部は赤・白・緑・墨描）頭部は貼毛 金銅円板装着 絹紐 鹿革

紐」とある。

[調査の結果]:本品の直接の調査の対象は、耳孔に通してつけた紐である。

貼毛:外観的に、毛は棕櫚のようにみえるが、馬毛の可能性もあるので、詳細な調査が望まれる。

裏面耳孔の紐:黄色乃至は黄褐色を呈して、やや柔軟である。汚れが目立つが、鹿革である。革紐の取り付けの結び方は「壺出し」（または「切り込み出し」、俗に「蟹出し」ともいう）法である。両面燻<sup>いぶ</sup>しではないかと推定する。厚さは2.1~1.5mm。革の幅は約15mmになる。

## 伎楽面 第124号師子：顎下の皮

資料の図版では「縦30.0 横35.5 奥行38.5 朴 貼毛 彩色（漆地には赤・緑・白・銀彩 白下地には赤・墨描）油塗 顎裏に鹿革貼 金具は鉄」と述べている。

[調査の結果]:調査対象は、顎の下面全体に貼り付けた毛の付いた皮である。



伎楽面第124号師子『正倉院紀要第28号』

全体の印象:「師子」の実物はかなり大きいというのが実感である。顔部一面に植毛の痕、または植毛の残片が見られる。顎の下側には毛付皮（現状:遠目には単なる皮にしか見えない）が貼り付けられている。すなわち、毛むくじゃらの顔をしていたのであろう。損傷が相当進んでいる。面の主体部は一木造で、全体として泥で汚れてい

るが、昔の保管中の雨漏れによるものという。内部左方の手前に墨書「周防」とあり、作成地か献上地かを示すものだろうか。目は、挿入された眼球が左右に動くように、細い縦棒の軸が入っている。口は、上唇中ほどの部分に補修跡が見られ、一木造の芯部に当る。

顎：顕微鏡写真によって熊皮と判断された。皮全体としては薄く、表面の毛はほとんど脱落しているが、皮組織に組み込まれた長い毛が全面に多数見られることから、銀面を含む乳頭層はもとより網状層もかなり侵食されていることが分かる。また、とくに長い残毛も部分的に残存することや、顎周辺部の赤黒い塗料には黒い長毛が埋め込まれて残っていることなどから、張り付けられた皮は毛皮で利用されていたものと推察される。1穴多毛であり、さらに馬具の障泥あおの顕微鏡写真との類似性から熊皮と判断した。その貼り付け方については、条にせず一枚物を貼り付けたものと見られる。

顎の取付金具：頭本体に顎を取り付けるために、頭の下部に一本の鉄の棒を横に通し、木部同士の擦れを防ぐために円形状の皮が入っている。厚さが1.5mm位、黄褐色でかなり硬い。色、硬さ、線維等の状態からみて牛皮ではないかと思われる。狭いところなので観察が困難だし触れることも出来ないが、推定した。

### 伝わる革帯の概況

資料等によると、革帯類としては北倉の斑犀はんさいえんそひ偃鼠皮御帯残欠、中倉の紺玉帯残欠及び南倉の革帯・革帯金具がある。修理されてほぼ完形に近い状態になったものや、修復不能なものまで実に多様なものが保存されている。なお、革帯金具の区分の中には「一部一枚革製のものがある」とされるが、今回の調査には供されなかった。その存在

を後で知ったのだが、製革技術の解明の意味からは極めて重要な事例であると思っている。観察できなかったことは残念である。

### 斑犀偃鼠皮御帯残欠〈はんさいえんそひのおんおびざんけつ〉残存本体

資料の図版では「巡方：縦3.1 横3.4 厚0.7 鉸道は銀。巡方・丸柄は斑犀 裏座は銀 一部に偃鼠皮残存」と書かれている。

[調査の結果]

鉸具（止め金具）から順に並べて1～11までである。その第3、4あたりの部分から剥落した小片がある。革質状に見えるもので、漆跡とみられる表面側では毛らしきものが点在している。本体をなす革は堅固である。

「モグラ皮」と推定される部分では形状は小さく、薄い。しかも毛らしきものから言えば、とてもモグラ皮とは考えにくいのではなかろうか。その毛は、脱毛法ではなくて剃り落としたような切り口に見える。現状では判断ができない。

提示された残欠の写真は2片だが、現物は既に3片に割れている。それほど残片は脆くなっている。断片そのものは小さいが、若干の細い毛らしいものが観察される。この破片を革帯本体に用いたとは考えにくく、装飾部分の断片と考えられる。漆膜も付着しており、革質は茶色に変色している。

大きい残片の2枚の顕微鏡写真から、裏面に直線的な線維が直角に交差するのが観察され、その上になにか固形物が塗ってあるように見える。断面では皮線維の膠着こうちやくが観察されるとともに、水平に走る線維質らしきものが見られる。これらのことから、品物の表面から、{漆+皮質+繊維質（麻布?）+無機物（胡粉?）}の四層の重なりが考えられる。すなわち、麻布で帯本体

を作り、表に極めて薄い皮を貼って、漆様のものを塗り、裏は白く塗ったという想像は可能であろう。

### 飾石装着の最高級革帯：紺玉帯

紺玉帯残欠とは、資料では「紺玉すなわちラピスラズリで飾った革帯と、その納箱。正倉院の革帯は先端の鉸具と尾端の鉈尾の間に銚か（正方形の巡方と蒲鋒形の丸軋）を十一～十二個飾るものが一般的である。紺玉帯は五片に分かれていたものを、昭和四十九年に修理接合したが、欠失部は補わなかったため、現在も二片に分かれている。帯は黒漆塗。先端の鉸具は銀台金鍍金。三個の巡方、七個の丸軋および尾端の鉈尾はラピスラズリ製で、革帯の裏側にそれぞれ銀製の座を付け、表より銀製の鉸で留めている。」

また、『平成十一年図録』によると「この革帯を飾る紺玉とは、ラピス・ラズリ（青金石）のことで、紺青と白の斑を呈する。ラピス・ラズリは正倉院宝物中では平螺鈿背鏡や斑犀如意などに用いられており、中国でも李静訓墓出土の象嵌首飾り（隋時代）などがよく知られている。ラピス・ラズリの産地としては、アフガニスタンのバダフシャンが最も有名であり、本例は当該期の広範な東西交渉を明示する遺品の一つである。…『唐会要』によれば唐の服制において、文武四品が金帯、文武三品已上のみが金玉帯と規定されており、玉帯が金銀帯の上に位置することになる。日本では延暦十四年（795）に参議已上に白玉帯が許されているが、奈良時代には『衣服令』によると一品以下、五位以上の朝服が金銀装飾帯であるものの、玉帯の規定がないため、天皇などにのみ玉帯が使用されたのであろう。宝庫の斑犀偃鼠皮御帯（北倉四）・斑貝・御帯（北倉六）は『国家珍宝帳』にも記さ

れるように革帯の最高位と判断され、この紺玉帯も、玉そのものの希少性も含めて考えれば、正倉院蔵の腰帯中の最高級品に属するものだと言えよう。」とある。



紺玉帯残欠『平成十一年正倉院展図録』  
装飾の石は美しい青色である。

### 紺玉帯残欠〈こんぎょくのおびざんけつ〉

資料の図版では「現存長156 幅3.3 巡方：縦3.1 横3.6 丸軋：縦2.3 横3.3 革黒漆塗 鉸具は銀製、鍍金。巡方・丸軋・鉈尾はラピスラズリ 裏座・鉸は銀」とされている。注：著者によって「ラピスラズリ」「ラピス・ラズリ」の二つがある。

#### [調査の結果]

**革帯部分：**革を折って二重にして縫ってある。芯は見られない。巡方部に継ぎ目がある。革の厚さは端の丸み部分では例えば3.8mm、2枚重ねの部分は1.8mm、1枚の厚さは0.6～0.7mmであった。次項の「革帯残欠」よりは艶を感じさせる外観で、漆塗と見られ、表面割れはほとんど見られない。塗料の剥落部では色は褐色、茶色、黄茶色の部分があり、銀面は消失しているものと見られる。革の断面では線維の絡みが見え、はっきり見える。線維の細かさと絡み具合から見て牛革や馬革ではなくて、小型動物の革ではなかろうか。

**小片化した断片：**紺玉帯から脱落した唯一の断片である。かなり小さいが、漆膜のな

い別の面を見ることによって、革帯の革組織の内部を観察できる。光沢のある漆に接する革は茶色化し、中心部にいくほど色が浅くなって黄褐色である。

### 革帯残片は観察に好都合

上記2件とは別に、「南倉141革帯金具」として分類されている一群の革帯の残片がある。光沢が乏しい黒色の革で、短く千切れ、修復困難な大小様々な形状の革帯が保存されている。ものによっては袋状に折り曲げられた革の内部が見えたり、断面が自由に見えたり、部分による色相の変化も見られたりして観察者にとっては極めて好都合であった。なお、其1や4号などの名称は観察現場における調査品目の呼称であって、その詳細は分からない。



革帯残欠【正倉院紀要第28号】  
光沢の乏しい漆様のものが塗られている。

#### [調査の結果]

其1：革帯の断面を見ると、袋状に包み込み、内側のやや上方で切り口が合わされている。包み込まれた帯の縁には麻を芯にして膨らみを持たせている。帯の長軸方向に麻の芯と帯の形を保つための上方と下方に各一条のミシン跡のような規則性のある縫い糸が走っている。厚さは測定しなかったが、薄かった。後述の革帯の共通性から牛以外の革と推察される。また、別の観察例では革帯の石は下方にあり、内側の縫目は上方に付いている。既述の紺玉帯では縫目は下方にあった。

其2：繋がりの最も長い帯には革の断面が見えるが、調査が困難である。色は浅く、白っぽい色相である。漆は薄く、艶がないが、その部分では革が茶色である。線維構造が細かいので牛以外の動物皮と思う。

其3：光沢のない漆塗り革で、その内部のごく一部ながら黄褐色に変色していない白っぽい部分が見つかった。それは袋状に巻き込まれて、外気に接しにくい状態の革の部分であり、製作当時の色合いに近いことを示しているものと推察される。また、土色系の茶褐色に変色している外に、紫がかかった色の部分も認められた。この色合いは紺玉帯の革の黄色の強い茶褐色とは異なるものであった。また、紺玉帯には麻の芯がなく、本品には芯が使われている。これらを総合的に考えると、両者の間には革の種類・製法・革帯の作り方などの面でかなり異なるのではないかと推測される。牛革以外のものではなかろうか。

4号：革の色は浅く、白っぽい色相である。線維は細かい。帯の内部は紫色気味で、カビが原因の可能性がある。革はかなり乳頭層を残しているが、その表面の銀面はもちろん消失している。消失の段階を示す貴重な残欠と考えられる。牛革か馬革であろう。

15号：鞘状の革帯を押し広げた中側の革の表面は薄紫色を呈する。その紫色がかかった表面には細かい斑点が見られるが、この染みはカビなどの痕跡ではなかろうか。明らかに、漆に接した面と、離れた層とではその影響に違いのあることが確認される。

これら一群の観察した断片については、線維の細かさ、若干の柔らかさのあること、厚さがかなり薄いこと、銀面の細やかさなどから牛革とは言いがたく、総合的には馬革の可能性が高いと考える。革の特徴を示す銀面の微細模様が損傷を受けていることから判定が困難であった。